

2026年度 自己推薦入試Ⅱ期（発達心理学科）「小論文」

(2025年11月15日実施)

合否判定の方法	《小論文》《面接》 小論文（50点）および面接（50点）により評価する。
合否判定の基準	小論文：B（30点）以上、面接：B（30点）以上、総合評価：B（60点）以上

《小論文》**出題意図**

知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体性・多様性・協働性を幅広く測るため、試験当日に出される課題文（発達心理学科の専門分野に関する内容）を読み、要約と共に自分の考えを800字以内で論じてもらう。

解答例

「顔は心を映す鏡」と言われるように、表情は感情を反映し、他者の感情理解を助ける重要なコミュニケーション手段である。しかし、表情は意図的に操作でき、本心と異なる表情を作ること也有可能である。それでも人は表情のやりとりを通じて相手とのつながりを感じる。筆者は、他者の表情を見ると自分にも同じ表情が無意図に生じる「表情同調」に注目して研究を進めてきた。表情筋電図による研究では、喜び表情に対して頬の筋、怒り表情に対して眉の筋が反応し、数秒見るだけで初対面の相手にも表情が「つられる」ことが示されている。

表情同調には二つの特徴がある。一つは、他者の感情理解を促進する点である。悲しんでいる人を見て自分も悲しい表情になると、ネガティブ感情が自分にも生じ、その感情経験を通して相手の気持ちの理解が深まる。これは、表情が感情の生起に影響する「顔面フィードバック仮説」や、表情同調→感情経験→感情認識という心理過程モデルによって支持されている。もう一つは、ミラーニューロン・システムの関与である。他者の表情を観察して自分の表情筋が反応するとき、下前頭回など共感に関わる神経ネットワークが活動することがfMRI研究によって示されている。

上記の内容から表情同調は単なる反射的現象ではなく、「感情理解の深まり」と「関係性の形成」という二つの基盤を同時に支える重要なプロセスであろう。特に臨床では、クライアントの表情を同調は言語化されない信頼の指標になりうる。逆に、同調が生じにくい場面では、相手が警戒している、あるいは関係構築に課題がある可能性も示唆される。表情をどのように同調するのかを見ることで、情緒の発達段階や安心感の程度を理解する手がかりになると思われる。表情同調の科学的知見は、今後の臨床実践や教育現場のコミュニケーション理解にも大きく寄与すると考える。

出典

藤村友美「顔と顔のつながりーコミュニケーションにおける表情同調」『心理学ワールド89号 特集 顔』（日本心理学会） 2020/4/15